

# 姻族の台頭と男性の参加

——中国農村における「月子儀礼」の介助者を視点にして

周 群英

(訳＝飯田直美)

## はじめに

家族には、社会の変化が反映されている。農村社会においては、家族が未永く続くことが主要な願いであり、その願いは産育儀礼の実践のなかに見出される。「月子儀礼」は、産育儀礼の一つとして、先秦時代に始まり、二千年以上の文化的伝統をもちながら、現代社会においてもなお盛んに行われている。人々は、月子儀礼を行うことで、伝統的な生育観念を現代の生活経験とする。このように、月子儀礼の継続と変化は、中国の家族間関係の新たな方向や、社会の変化における新たな秩序を考察するうえで、一つの重要な鍵をあたえるものと思われる。

そこで本稿では、筆者が北京郊外の川底下村において老・中・青年の三代の女性たちに対して行った、この五〇年間の月子儀礼の実践と変化に関する調査結果に基づいて、家庭と個人の相互作用という視点から、中国の農村社会における家族の構造や形態、家族間関係の変化と継続について分析する。さらにその分析に基づいて、月子儀礼や家族の変化と社会的発展との間の関連性について考え、親密圏（家族）の儀礼がどのように公共圏（一般）において意義を生み出すのか、明らかにする。具体的には、以下の問いに対する答えをもとめる。すなわち、月子儀礼期間の産婦や嬰兒の介助は誰が最もするべきなのか、介助者についてはどうな変化がみられるのか、それはどのような仕組みのもとで生まれたのか、月子儀礼の介助者の変化は

家族間関係をどのように変えたのか、といった問題である。そして、このような家族の変化から社会の発展をみることで、中国の家族の未来と未来の家族について考察する。

## 一 先行研究

歴史という時間軸と世界という空間軸からみると、家族研究の規範は、二度の転換を経ている。一度目は「伝統家族」から「現代家族」への転換、二度目は「現代家族」から「個人家族」への転換である。このような家族の変化は、社会の転換と密接に関わっている。農業社会から工業（現代）社会への転換は、新たな家族構造と価値観、すなわち「核家族化」をもたらし、工業社会から現代社会への転換は、「家族の個人化」をもたらした。伝統家族が開放的な組織で、その中心に社会性と生産性があるとすれば、一方の現代家族はプライバシーを尊重し、感情を重視するという特徴をもつ。ポストモダン社会以前、「核家族」は西洋人によって選択された家族の居住形態であり、価値体系でもあった。しかし、ポストモダン社会では、「個人化」(individualization)が最新の家族概念とされ、その定義については、対象を家族全体から個々の成員にかえて分析されている。

伝統家族は、共有する経済的地位や政治的利害関係に

よって、または規範(norms)や権威と服従の価値観(value of authority and deference)によって結びつけられている。その家族構造には、権力の階級序列や、夫婦間の冷めた感情、親子間の疎遠な関係等の特徴があり、感情による関係ではなく、双方の経済的利益によって結びついたものといえる。家族と外部関係との境界線は曖昧である。<sup>(3)</sup>中国の家族の概念は、西洋のそれとは大きな違いがある。カルプ(Daniel H. Kulp)は著書『華南的鄉村生活』において、「家族主義」を提唱した。彼は、家族主義は一種の社会制度であり、家族とはあらゆる判断の基礎であり基準であり、家族にとって有益であれば受け入れるが、禁忌と見なしたものには制限を加えるとし、中国村落社会の政治経済や宗教信仰、親族など、あらゆる制度の中核である、と分析した。<sup>(4)</sup>伝統家族は、職場・職業と家族・家事において、家族主義との違いが不明瞭である。家族は生産単位であり、生活単位でもある。多くの中国研究者は、家族主義は中国の伝統家族の「合作社」(協同組合)モデル(the corporate model)に類似するとし、中国の家族は完全に理性的な経済上の協同組織であり、自己の利益は家族の全成員が共有する収支であり財産であることを十分に理解しており、その主な特徴は、社会の変化に対応する能力と柔軟性をもっていることにある、と分析している。構造を重視する「合作社」モデルは、実際には「集団行動方式」がとられており、年功

序列の不平等な構造には個人が欠落している。<sup>(5)</sup>

「大家族」はヴィクトリア時代には主導的地位を占めていたが、農業社会が工業社会へと変化する、「核家族」がそれに取って代わり、一八世紀以降の主要な家族モデルとなった。マルクスは『資本論』のなかで、早期工業化が緊密な家族生活を破壊し、工業化する以前から現代家族の特徴は現れていたと指摘した。ウィリアム・グッド (William Goode) は、現代化は、価値観の変化を表わし、家族制度と工業化に対して大きな衝撃を与え、拡大した血縁家族制度を夫婦家族制度へと転換したと指摘した。夫婦家族の観念では、個人の価値や幸福は、家系や家族の継続よりも優先され、家族の間で性別や年齢間の平等が重視された。<sup>(6)</sup> ローレンス・ストーン (Lawrence Stone) は、現代家族には次の四つの重要な特徴があると指摘した。(1) 家族成員の感情の連携が強化され、隣人・親族の重要性が低下した、(2) 個人の自主意識が増加し、個人の幸福を追求する自由の権利への意識が増加した、(3) 性快楽と犯罪の結びつきが減少した、(4) 身体的なプライバシーへの需要が増加した。<sup>(7)</sup> マーク・フッター (Mark Hutter) は、夫婦家族制度は個人主義や平等主義の価値観を満たし、さらに工業社会や技術社会の秩序にも適合することができ、その観念や価値観は工業化社会における観念や価値観と一致するため、夫婦家族制度と工業化社会は互いに依存しあい、不可

分の関係にあると指摘した。<sup>(8)</sup>

一九六〇年代以降、学界で、工業化や現代化といった「大きな物語」〔訳注＝仏哲学者ジャン＝フランソワ・リオタールが提示した、近代社会が目標とした理念〕に対する再考がなされるにつれて、家族理論では、個人に対する家族の作用が強調されるようになり、家族の個人化理論が提言された。ジャック・グッディ (Jack Goody) は、家族の個人化の特徴について、配偶者を自由に選択するなど婚姻が私事化され、個人の行ないは個人的な私事として、もはや大家族の利益とは関係なくなつたと指摘した。家族分析や家族研究の焦点は、家族そのものから家族成員とその関係へと推移した。閻雲翔 (Yan Yunxiang) は、黒龍江省下岬村の研究で、家族は個人的生活の聖地となつて、個人は独立した生活を持ち始めており、個人的生活に西洋のような二つの転換が現れているとし、この転換の過程には、家族の規模や構造の変化を伴う一方、実質的には個人や個人的権利の観念が生まれており、国家が家族の変化に最も重要な作用を及ぼしていることを見出した。<sup>(9)</sup>

現代化への過程では、家族構造、家族関係、家族価値の変革が促される。伝統家族の生産性や社会性といった特徴は次第に薄れ、感情とプライバシー重視を特徴とする現代家族が現れて発展し、主流モデルとなった。<sup>(10)</sup> 閻は、現代の家族研究は、社会構造や文化規範ではなく、個人的体験や

個人の主体性に着目して、集団的な道德言説から個人生活上の道德的体験へと注意の方向性を変えるべきであると指摘した。<sup>(1)</sup> 家族研究に関して、「拡大／直系／核心」という家族構造の典型的な区分は、今まさに、「拡大／直系／核心／個人」へと発展する傾向にあり、個人化は、一つの社会構造になりつつある。<sup>(2)</sup> 新たな価値体系と行動パターンは、家族の変化がどのように起きるのかを理解する鍵である。

しかし、中国の家族の変化にはとりわけ複雑な特徴がみられる。理論的には、やはり核家族と直系家族が二大主流家族形式ではあるものの、都市には「臨時の直系家族」、農村には「多世代の扶養家族」などの形が普通に存在する。核家族と直系家族の間には多様で複雑な、且つ見過ごされがちな中間のパターンが存在すると指摘する学者もいる。たとえば、孫の世話あるいは高齢者の介護などの必要性から、いわゆる「輪養家族」〔親が子どもたちの家を順番に回って住む〕、「臨近家族」〔子どもが親の近くに住む〕、「拆分家族」〔両親が子どもたちの家にそれぞれ分かれて住む〕といったフレキシブルな家族形式が生まれている。<sup>(3)</sup> また、都市家族では、個人は家族を支配する力を持ち、個人が中心となって家族を形成するが、家族が個人の生活決定することはないと指摘する学者もいる。<sup>(4)</sup> 実態から見ると、家族現代化理論が描く完全な「孤立した核家族」はみ

られず、家同士の付き合いや相互協力などの面で親族関係や家族ネットワークは密切な往来がある。<sup>(5)</sup> 金一虹は、家族主義は村落が大きく変化するなかでも依然として頑固に存在しているが、個人、特に女性や若者の権利意識の上昇と、家族関係の枠組みの変化が進み、父権の衰退や双系化する傾向がみられ、「夫方居住」が主流であつた状態から、「新居制」〔結婚して夫婦二人で新しく居を構える〕や「両頭婚」〔結婚しても夫婦のどちらの家にも属さない考え方〕などの新しい結婚生活モデルが増えていることを指摘した。<sup>(6)</sup> 唐燦 (Tang Can) は、都市家族は親族関係を発展させる伝統を重視し続けており、親族間の親密な感情と互恵的な相互関係行為はかなり活発であるが、同時に、都市社会の家族関係は個人を制御支配する権力を失い、個人は密接な相互作用の中でもやはり自主性を発展、保持することができると指摘した。<sup>(7)</sup> 家族構造とその規模は日に日に小型化しているが、まだ核心化には至っておらず、家族の平等化と個人の自主化の傾向が併存している。中国の家族変化は典型的な家族現代化理論の説明とは完全には一致しない。中国の家族はその独特な価値理念と生活様式により、独自の変化の趨勢と現代家族モデルを示している。

## 二 研究方法

川底下村<sup>(18)</sup>は北京西部の門頭溝区齋堂鎮西北部にある山あいの自然村で、北京市区から九〇キロメートルの距離にある。村域面積は五・三三平方キロメートル、村落が占める面積は約一万平方メートルである。川底下村は明代に建てられ清代に発展した。村内にはほぼ完璧に保存された明清時代の山地四合院七四棟、家屋四六一軒<sup>(19)</sup>があり、北京市及び国家級の重点文物保護単位となっている。一九九六年に村に委託され、明清四合院を完全に保存した民俗観光地に発展した。帰郷して創業する地元村民を引き寄せ、また近隣村の余った労働力を取り込んでいる。旧家屋は村民の生活空間であるとともに観光業における生産道具でもあり、居住と営利の相乗的働きを兼ねている。二十数年間の模索を積み重ねた結果、村は富み、村民は助け合いの近隣関係を守って、商業競争にしのぎを削りつつ和やかに共存している。

村の人口基数は小さく、合計六四戸一〇七人、そのうち男性は四七人、女性は六〇人である。<sup>(20)</sup>より多くの産育経験のある女性にインタビューするため、筆者は祝日前後の人の多い状況を選んで入村した。村では、民宿を経営する地元的女性、この村に出稼ぎに来ている近隣村の女性、他所

からこの村に嫁いだ女性を含め、計三二名の産育経験者にインタビューをした。対象年齢は、最高齢七〇歳（一九四七年生まれ）、最年少三四歳（一九八三年生まれ）で、多くは三七歳から五七歳に集中している。筆者は二〇〇七年一〇月一日から八日まで、二〇〇八年五月一日から一〇日まで、二〇一〇年六月三日から一五日まで、二〇一六年一〇月八日から一三日までの四回にわたり調査研究のために川底下村を訪れた。前三回は筆者一人で行ない、最後の一回は三名の修士課程の学生と共に行った。

密着インタビューは本稿で最も主要な資料収集方法である。取材場所は厨房、中庭や道端、樹の下で、取材現場では野菜をより分け、トウモロコシを焼き、部屋の片付けや掃除を手伝った。インタビュー方式は一对一もあれば、数人对一人のときもあり、インタビューの長さは九〇分から一二〇分間であった。村ではどの家も民宿を営んでいるため、入るのにノックの必要はなかった。来意とテーマを説明すると、対象者は筆者が宿泊客ではないことになったりし、また「坐月子」の何を調査するのか」と驚いていた。仕事が多くて時間がない人もいた。そこで、子どもの近況を話題にしたり、進んで仕事（野菜のより分け、食器の片付け、シーツの交換など）に加わるようにしたところ、多くの女性は作業をしながら質問に答えてくれた。彼女たちは月子期間の出来事について覚えていて、感じたこ

とやそのときの気持ちを隠すことなく教えてくれた。時には筆者も自分の出産経験や月子のときの感覚を彼女たちと分け合うことができた。対象者の同意を得られたところで、多数のインタビューを録音に残し、回答者の語り口調など非文字の表現を入手した。

### 三 月子儀礼の介助者の変化

イギリス人類学者モーリス・フリードマン (Maurice Freedman) に代表される「宗族規範」研究では、宗族組織及びその親族関係に着目し、父系集団あるいは父系継承の系譜、さらにその社会組織をなす運行システムや構造、機能を重視し、宗族の事例を通して中国鄉村社会に関する問題を解釈することを試み、文化の上で宗族制度が親族関係の秩序と構造を決定することを明らかにした。宗族規範の下では、娘の身分の境界は曖昧である。娘は生家では家族の臨時または付属成員と見なされ、社会文化の法に沿った合法的な身分と地位がない。彼女の未来は嫁ぎ先であり、嫁して子を儲けることを通してのみ、合法的に永久の身分が得られる。出産は女性にとって夫家での地位と死後の供養を獲得するための第一条件であるが、それはまた穢れを得る結果ともなり、「危険な」文化的地位であることも事実である。穢れは象徴的符号であり、物理的な実体あ

る存在としての汚れも、道徳的意義に分類される秩序意義上の汚れも含まれる。穢れは否定的な方法で社会の分類と秩序を保護し、人びとの行動の境界と方向を規定する。医学者や哲学者は、分娩は不純なもので産婦の血と排泄物は神を怒らせ、家族の人口増加を脅かすものと考えた。このため実家での分娩は禁忌のひとつとされた。

#### (一) 婚家による介助——偏った責任と義務

川底下村での調査研究で、大多数の女性が嫁ぎ先で「坐月子」をしていることがわかった。嫁ぎ先が介助するパターンには二種類ある。一つは主に姑が介助するパターン、もう一つは夫が介助するパターンである。介助の内容は炊事、洗濯、日光消毒、家畜の世話、掃除等が含まれる。どちらのパターンであれ、産婦は家事労働のみ免除され、子どもの面倒は免除されない。子どもをあやして寝かしつけ、ミルクを与え、おむつを替えるのはみな産婦の仕事である。本節では伝統文化に規定される姑による介助について紹介する。

嫁が夫家を主とするのは根本的な倫理観念であり、最も基本的で現実的な境遇である。『礼記』「内則」は嫁姑の付き合い方を「婦將に事有らんとすれば、大小必ず舅姑に請ふ」(嫁は何かしようとするときは事の大小に関わらず必ず舅姑にお伺いを立てること)と定めている。父権文化で

は、女性嫁しては夫同様に夫の父母に従順で孝を尽くし敬わねばならない。伝統的に嫁姑の権力関係は平等ではない。姑は支配的地位を占める主導者である。嫁の慎ましさ<sup>(26)</sup>に対して、姑はいつも横柄で残忍である。新妻からすると、姑は夫よりも重要である。と言うのも、彼女たちは共に炊事、整頓、針仕事をするからである。姑からすると、息子の嫁の到来は労働負担の軽減であるが、「子宮家族」〔母が息子に抱く一体感〕にもたらされる新たな矛盾でもある。嫁は姑の息子に対するコントロールを弱め、親密な母子関係を脅かす<sup>(27)</sup>。家庭内の緊張は家族成員の関係や権力・秩序を示している。しかし、儀礼が日常と入れ替わる場面では全く異なる情景が現れる。日常生活では、新妻は姑に奴隷のように使われるが、月子期間には姑は嫁の介助に氣を使い、低い地位の嫁と高い地位の姑とで身分が入れ替わる。

一九三九年生まれの郝さんは三人の男子を出産し、いずれも安産だった。長男は一九六一年生まれ。第一子の出産は慎重を期して、街の朝陽医院で出産したが、次男と三男はどちらも家で産んだ。はだしの医者も助産婦も頼まず、村の取り上げ婆さんと呼んだ。彼女は思い返ししながら言った。

姑が介助してくれた月子はどれも四〇日間だった。

月子の間は日に何度も食べた。朝食と昼食の間に一回

と、昼食と夕食の間に一回増えて、一日に五回食べた。すべて姑が作ってくれた。あの頃はガスコンロもなくて練炭を使うのも惜しいので、木材を備蓄して薪で食事を作った。食事を作るのは今よりもずっと骨が折れた。普通、粥はまずよく炊いて、またしばらく火にかけて温めて食べる。はじめの三日間は粥を食べ、三日過ぎたら麵片〔麵の生地を伸ばして手でちぎって茹でたもの〕を食べた。柔らかめだった。普段はマントウを食べるが、そのときはマントウも麵も少しだった。姑が蒸すのは毎回少なく、雑穀も混ざっていた。姑は固いものも冷えたものも食べてはいけなと言った。産後一カ月は固いものや冷えたものは胃に良くないからだそうだ。月子の間、私は部屋にいて、ベッドからも降りず、外にも出ず、大小便も部屋の中でして、姑が処理してくれた。最初のころは家事をせず、家畜の世話のような家の仕事はすべて姑がした。子どものおむつもおむつすべて姑が洗ってくれた。数日ごとに鍋で湯を沸かして消毒した。二〇日後に自分でおむつを洗ったが、姑が沸かしてくれた熱湯に水を混ぜて、お湯を使って洗った。

郝さんは姑が自分のためにお湯を沸かし、食事を作ってくれたことなどはつきりと覚えていた。月子の間は洗面にお湯が必要で、おむつや哺乳瓶も熱湯で殺菌消毒しなけ

ればならず、これに大量の熱湯を使う。その頃熱湯はすぐ手に入らず、石炭や薪を使わなければならなかった。石炭は稀少で高価なもので、貧しい家では実際に石炭は使えない。<sup>30)</sup> 郝さんは自分の坐月子の経験を回想しながら、息子の嫁たちの坐月子を介助した経験もあわせて語ってくれた。

嫁たちの月子は私が介助した。彼女たちを食べさせて、家事をして、子どもの面倒を見た。以前より食事

作りの面はよくなっていたので、休憩もできた。嫁はミルクをやるだけで、そのほかのことは全部私がした。

川底下村では出産して子どもが生まれることを重視しており、韓姓の宗族を絶やさないと村民共通の願望であり責任である。月子儀礼はこうした出産理念を外在化（実践）したものであり、嫁を介助することは偉大な功績に値するものと見なされている。<sup>31)</sup> 姑が嫁の産後を介助しなければ、道徳的圧力を負うことになる。姑と嫁とともに夫家の先祖を祀り続けるという形式的かつ実際的な社会的義務の責任を共有しているため、嫁の産後の介助には先祖を祀り続けるという道徳的な力が含まれている。まさにエンゲルスが言うように、親族とは決して単なる名譽的称号ではなく、確実かつ異常なまでに鄭重な相互義務を表わしており、このような義務全体が社会制度の実質的部分を構成している。<sup>32)</sup> 儀礼の介助を通して嫁姑間の家族アイデンティティは強化され、血縁関係がもつ社会的責任が伝達されて

いく。<sup>33)</sup>

伍さんの話はごく一般的である。彼女は一九七五年生まれで、村の売店で店員をしている。店主は画家で街に住んでおり、食事住まい付きで毎月二五〇〇元の賃金をもらう（二〇一六年）。彼女は遠く四川からこの村の隣りの桑峪村に嫁いだ。夫は自分より十数歳年上で、経済条件もあまりよくない。彼女は言う。

清明節が過ぎると売店に出て、通常三月から一〇月末までここで働く。冬（十一月から次の年の二月までを指す）は家に帰り、家事や子どもの通学の送迎をする。私の不在時は姑が夫と一緒に子どもの面倒をみているが、私が戻ったときは姑と一緒に暮さない。夫と私は姑とは早くに分家して、普段は四大家族。

彼女は次のように自分の月子の思い出を話してくれた。

私は四川出身で実家は遠いので世話をしてもらえず、月子の間は姑が介助してくれた。私は何もしくなくてよく、おなかが空いたら食べた。回数は決まっていない。この辺りでは月子の間は主に麵湯（うどんの茹で汁）や粟粥だが、私は南方の出なので麵条（うどんのようなもの）は食べないし、麵湯を見ても食べる気がしない。姑は私のために米の粥を炊いてくれたこともあった。私は主食も米のご飯で、彼らはマントウや麵頭（マントウと同じような蒸しパン）を食べる。二種

類のご飯を作るのは面倒だけど。母乳の出をよくする

ために、姑は私に鶏や豚足のスープを作ってくれた。

家の他の家事、たとえば子どもの服やおむつの洗濯やアイロンがけはみな姑がした。月子の間、私は毎日床に横になって、眠っては子どもにお乳をあげていた。

郝さんと伍さんの月子の話では、自分でベッドから出ることもできず、食事は姑が作った。姑は月子の期間に食べなければいけないものを作るが、私が食べたいものを作ってくれようとは思わない。たとえば、月子のはじめ何日間かは薄い粥や薄味のスープのような流動食しか口にすることができず、マントウが食べたくても食べられない。姑はたとえ月子儀礼では地位の低い介助役を演じてはいても、食事制限や調理方法の面では主導者の地位と優勢を保っていることがわかる。このことは、家庭内の権力関係の図式が、世代が上の者が下の者を統治し、夫が妻を統治する「長幼序あり、夫妻別あり」<sup>(34)</sup>『孟子』滕文公章句の思想と関係があることを示している。

多くの状況において、姑たちのイメージは中性的である。彼女たちは機械的に課せられた務めを履行する。便宜的な儀礼の役目は実質的な効果を生み出しはしないが、「構造化された現状」を維持している。<sup>(35)</sup> 吳小小は言う。

月子の間、姑は毎日八回食事を用意したが、実際には、私は少ししか食べなかった。姑はただ作るだけ。

部屋に届くと、私は気持ちだけ何口か食べる。私が食べた鶏は二羽以上にはならない。姑は毎日そうやって何回も用意し、私は食べたいと思う分だけ食べる。彼女は私が食べるか食べないかに関わらずこうして何回も用意する。これが自分の責任だと彼女は考えている。私の坐月子について、舅は姑に、私が好きな食べものを作ればそれで世話は十分だと話していた。舅は口にしたことは守る。

姑が嫁にスープや粥を作る、これには深い社会的意味がある。介助者という身分は、実際には姑が儀礼に対して信仰と規範の生産者であり伝道者であり執行人であることを表わしている。また一方で、出産した嫁のために栄養ある食物を提供することは、嫁ぎ先の認可と承認を示している。<sup>(36)</sup> 貴重な鶏と卵は意味深い象徴的符号として「承認」の意味を付与され、嫁姑関係を結びつける要となる。嫁が「よそのもの」から「身内」へと内部化する過程を暗に表している。<sup>(37)</sup>

## (二) 共同での介助——静かな変化

生活構造と労働構造は農民の生活と村落政治に長らく影響を与えてきた。<sup>(38)</sup> ここ二十数年来、村の観光経済の発展に伴って、村落の三つの「房門」の境界は次第に曖昧になり、「熟人社会」全体の文化規範や訓戒の程度が弱まって

きた。「男が畑を耕し女が機を織る」家族制度から、「夫婦共に働く」生計図式へと変わり、夫唱婦隨の民宿経営は女性の家庭での地位を相対的に高めたが、農村経済あるいは社会的な男女関係の図式に構造的な変化を生み出してはいない。「方夫居住」制度は、若い夫婦が夫の父母と同居することをいう。「古宅套院客棧」で働く遊さんは地元の本村に嫁いだので、地縁の強みで自分の母親が月子の介助の役割を分担するのには有利だった。彼女は言う。

月子には姑と実母と一緒に介助してくれた。二人は、姑が午前、母は午後と分けていた。私は地元嫁いだので、両家の距離が近かった。私は娘の月子も婚家と一緒に介助をした。こうするのはとてもいいと思つた。みんなで分担したのでそんなに疲れなかった。

川底下村では、月子を共同で介助するのに二種類のパターンがある。一つは姑と母が合同で月子の全ての期間を介助する。姑は生まれた子どもの世話を、実母は産婦の世話を。血縁を根拠にした理想的な分業方法である。もう一つは二人の親が期間の満了までそれぞれ一定期間を介助するもの。いずれの方法も実母が嫁ぎ先に向いて世話を。前者は一般的には姑が主となり、実母は補佐をする。後者は実母が月子のはじめ何日間かを介助し、姑がその後の期間満了までを介助する。王さんと「好就来客棧」の女主人は二人とも二番目の方法だった。王さんは一九六

三年生まれの河北の人。第一子の娘は一九八六年生まれ、第二子の息子は一九九一年生まれ。第二子の月子は実母と姑の共同介助で、実母は北京の婚家に来て七日間介助した。残りを姑が介助して期間が満了した。以下は彼女のインタビューの記録である。

前によくない経験（第一子の前にひとり夭折しており、第一子も出生後病気で入院したことを指す）があるので、二人目を身ごもったとき、私と夫は相談して北京に帰って出産することにした。姑と夫の兄が門頭溝に住んでいて、私と夫は村に住んでいた。二人目が生まれるとき家で出血し、門頭溝（齋堂鎮）の兄の家で一日間過ごしてようやく生まれた。私の母は北京に来て一週間介助をして帰った。夫は門頭溝龍泉山荘で働いており、主に姑が私の介助をしてくれた。彼女は毎日五、六回粟粥や挂麵（そうめんのような乾めん）や紅糖水（赤糖を水に溶かしたもの。昔から栄養補給に飲む）を作ってくれた。牛肉、米飯、マントウや餅は食べてはいけないと言い、作ってくれなかった。月子の期間は家事をせず、三〇日を過ぎてはじめて床掃除や机を拭くようなことができた。二人目は生まれてすぐ入院し、私は月子を過ぎて帰宅した。子どもと一緒にいないので、姑は私の気が滅入らないよう、半月後には村の大通りを散歩に一回りすることに同意し

てくれたが、よその家に行くことはできなかった。

姑は、祖先から伝えられた規則は守り受け継いでいくべきだが、健康は習俗よりも大事だと考えて、王さんがまだ月子を終えていなくても村の大通りへ気晴らしに散歩に出ることを許したのだろう。伝統は、変化しつつある習俗の規則や制限とともに一層ゆるまり、人びとに受け入れられている。

「好就来客棧」の女主人は一九八六年生まれで中等専門学校卒業。彼女と二人の従業員とで民宿を経営している。

夫は別の村で住宅建築の請負をしており、子どもは齋堂鎮で学校に通っている。一家三人は一年中村に住み、冬にたまに齋堂で何日間か過ごす。息子は二〇〇八年五月に門頭溝婦幼（保健医院）で生まれ、半月のあいだ入院した。姑と実母と一緒に月子を介助した。

私は月子の間は家事をしなかったが、子どもは自分で世話をした。うまくあやせず、眠りが浅くて、おろすすぐ目覚めてしまい、抱くと眠るので、一晚中抱いていた。母が何日か私の介助や家のことをしてくれたが、すぐ帰っていった。姑は食事を一日に五、六回作ってくれたが、薄い粥や麺湯などだった。彼女も家事や掃除や部屋の片づけ、子どものおむつを洗うなどしてくれた。姑の古い考えでは子どもは母親がみるもので、彼女たちの世代は月子の間はみな自分で世話を

したそうで、姑は手伝ってくれず、子どもを抱くこともなかった。月子の間は子どもは満腹になれば眠るもので、目が覚めるのはおなか为空いたからで、乳を与えて満腹になればまた続けて眠るというのが姑の考えだった。夫は夜だけ手伝ってくれたが子どもの世話はしなかった。夜もよく眠れず寝不足だった。私は自分の月子はよくなかったと思う。後遺症が残り、今も腕や腰が痛い。きつとずっと子どもを抱いていたせいだ。私の月子はこの三つに尽きる。睡眠、食事、抱っこ。病院では看護士が毎日子どもの体を洗ってくれたが、帰宅してからは気候も寒くなかったので、私と姑と一緒に毎日洗った。しばらくしゃがんでいて立ち上がると、腰をまっすぐにできなかった。いまでも腰はよくなくて、ずっと痛い。これは全部産褥病だ。嫁姑の関係はよくない。子どもができてから、色々なことすべてで関係はよくない。年寄りとは若者では考え方が違う。年寄りは子どもの世話は上手ではない。だから私が全部自分で子どもの世話をした。子どもができる前にはこのような衝突はなかった。

子どもができて家族が増えるのは喜ばしいことだが、嫁姑が「恨み」を作る可能性もある。俗に言う「月子の恨みは一生もの」は、月子の間、嫁は体が衰弱し動くのも不便で、ただ姑の世話に頼るしかない。嫁姑というもともと距

離のある状況で、平和共存できるような習俗に対応できなければ、急激に接近したことでかえってお互いに衝突してしまうことになる。嫁姑の両世代では家族に対するイメージが異なり、さらにこのイメージが各自の文化的武器を形成している。多くの女性は自分たちと姑あるいは夫家の年長の女性との間の感情的衝突のせいで月子病〔産褥病〕になつてしまう。老いた姑は月子の介助をよくしておかないと、老いて動けなくなつた時、お返しに嫁からいたわれない危険性がある。嫁の「坐月子」を介助することは家族主義の文化的処置であり、また世代間の実用的な交換行為でもある。

### (三) 実家による介助——姻族の台頭

介助者を手配する際の新しい傾向は、姑からすれば解放でもあり剥奪でもある。姑は忙しい家事労働と育児の苦勞から抜け出すことができる一方で、儀礼に参加した者が得られる多くの感情的な満足<sup>(43)</sup>を失うことになる。姑たちは権力の喪失を二度経験している。一度目は分娩の医療化であり、助産の権力は医者と助産師に渡つた。二度目は月子という空間の変化であり、産婦の介助と子どもの面倒を見る権力は専門の看護人に渡つた。また、産婦は姻族関係の動員、すなわち実母の付添いと姻族の訪問によって自己の権力を強固にした。嫁姑関係と母娘関係は觀念の変遷とともに

に変化が生じた。<sup>(44)</sup> 伝統的親族関係は日増しに構造が瓦解し、階級、服従、尊卑等の既定の規則は日々ゆつくりと効力が失われつつある。

「城堡客棧」の林さんは一九六六年生まれで、二人の男の子を育てた。林さんは山西省大同の人で、友人の紹介でこの地に出稼ぎに来て二カ月になる。一カ月の給料は食事住居付きで二八〇〇元（二〇一六年）。夫は山西の炭鉱で働いている。長男とその嫁は北京市内で働いており、次男は実家で高校に通っている。すでに大同市内に家を買ひ、いま出稼ぎしているのは息子に家を買う資金を用意するためである。春節の期間には一家五人が揃ひ、長男と嫁は帰省して何日か泊まる。インタビューの時、林さんはずっと靴の中敷きを刺繍していたが、筆者の質問一つ一つに真剣に答えてくれた。

長男は一九八九年生まれで、次男は一九九九年生まれ。二人は年が十歳離れている。二人の月子はどちらも三〇日間だった。市内で子どもを産んだので、県にいる姑の家から遠かった。夫は仕事に行き、私の母が介助をしてくれた。次男を産んだときは、母が二〇日間見てくれたが、用事があり家に帰ってしまった。あとの一〇日間は自分で炊事をし、子どもの面倒を見た。夫も仕事から帰ると手伝ってくれた。

林さんは儀礼の規範を二重に逸脱している。姑が坐月子

の介助をする伝統を守らず、また月子の期間を満了（少なくとも三〇日間）しなかった。似たような現象はごく普通のことである。たとえば湖北の秀秀さんは二人目の月子では、実母は二〇日間介助すると帰ってしまった。それは家の農作業のためであったが、今回が二回目の月子で経験があり、自分で自分の世話が十分できるからでもあった。

実家で月子の介助をするということは、嫁ぎ先での月子の介助が、以前からあるもの（*apriori*）として見なされなくなったことを示していると同時に、社会の明確な規範としての完璧な知識を持っていたとしても、どのように行動するかは予測できないことに気づかされる。規則と実際の間には大きな差が存在している。

陳さんは「曉梅客棧」の女主人で、一九七一年生まれ。身長は一六三センチほどで均整のとれた体つきで、清潔でてきぱきしている。四川の人で七番目に生まれた。学校には行かず、一九八七年にこの村に嫁いだ。

私にはひとり娘がいて一九八九年生まれ。出産したとき私は二〇歳になっておらず、一八歳だった。出産年齢に達していないと川底下村では罰金があるので、人目を避けて実家に戻った。夫も一緒にいてきて、二カ月過ぎた。私の実家の風習では、外に嫁いだ娘が実家で出産して坐月子をするのを許さなかったの

で、私は二番目の兄が経営する茶館の傍に部屋を借りた。実家からも近かった。両親と夫が坐月子を介助してくれ、洗濯や食事の支度、掃除などをしてくれた。子どもは私が自分で世話をした。子どもは小さすぎて、夫は触れようとしなかった。

月子儀礼の介助の受け持ちは、嫁ぎ先（夫方親族）から、嫁ぎ先と実家の共同（双系）、実家（妻方姻族）へと変化した。この変化は、親族の力が弱まり姻族が強くなったことを意味する。親族と姻族の双方を重んじる傾向は、家族関係の構造の変化を促した。この変化は家事労働、子育て、介護、都市でのマイホーム購入など、あらゆることすべてにあらわれている。人口構造では少子高齢化を特徴とする社会への転換がみられる。女性の親族ネットワークは父系に限らず、妻の実家の親族にまで広がり、双方向（*bilateral*）に延びた親族関係が発展した。儀礼の変化は親族関係ネットワークを両方向とも重視しながら発展させ、姻族と母系血縁関係の意義が日増しに顕著になっていることがわかる。たとえば父権制の核である継嗣制度が根本的に変わらないとしても、親族関係の双系化（*bilateralism*）はますます普遍的で客観的な事実となっている。

川底下村の人たちはこのような変化を喜ばしく見ている。「新遠客棧」の李さんは長男の嫁の月子を介助したが、彼女は長男の嫁の出産条件は自分の頃よりも良いと思ったそう。次男の嫁の月子は嫁の実母が介助した。当

時自分は羊を飼っていたが、嫁の実母はすることもなく暇だったので、李さんは実母が世話をするのが良いと思ったという。「古宅套院客棧」の遊さんは実家と嫁ぎ先が共同で月子の介助をするのがよいと感じ、みんなで分担したら疲れなかったという。儀礼の介助者制度は、実際には親族関係の本質と親密さの度合いを反映してきたが、豊富かつ生きた介助経験が伝統儀礼の規範を書き換え、新しい家族の価値理念を構築している。ただし、新しい介助者のしくみは出現したばかりで、なお旧来の制度が立ちはだかつている。このためさまざまな介助パターンが並立共存する状況が形成されている。しかし、変遷傾向はこのまま続き、個人の儀礼生活を変え、家族関係を再構築していくだろう。

#### (四) 夫による介助——男性の参加

歴史上、家族の世話は家族の中で主に女性によって無償で提供されてきた。他人の世話は女性の当り前の仕事と見なされ、それに関する問題は家族と個人の私事と見なされてきた。<sup>(48)</sup> 女性は子どもの世話や炊事掃除などの家事労働に責任を負う。<sup>(49)</sup> 母親と祖母は三歳以下の子どもの理想的な子守りである。<sup>(50)</sup> 姑であれ共同であれ実家であれ、産後女性の世話や子どもの面倒を見る職責は最終的に(老いた)女性の肩にのしかかる。

賀蕭は、出産の時、一般的に夫はその場におらず、出産

後も妻と子どもの世話をすることは少ないと指摘する。<sup>(51)</sup> 楊懋春は、若い夫は子どもに何の関心もなく、嬰兒の世話は完全に女の仕事だと思っているので、赤ん坊に触りたがらないと分析した。<sup>(52)</sup> しかし、私は川底下村の調査で、中年男性が(月子食材の)買い出しに行き、子どもをあやし、おむつを洗い、月子用の食事を作るなど、深く月子介助に参加しているのを見た。羅さん(一九六三年生まれ)は妻の坐月子を介助する唯一のインタビュ対象者ではないが、彼の話は深く印象に残っている。彼は焼きトウモロコシの屋台でインタビュを受けた。貧しいために家を買うお金がなく、この地で嫁も見つからず、ずっと独身だったが、五〇歳近くになってやっと妻を娶った。妻は若いだけでなく負けん気が強く、「おちんちん」のついた子を産んでくれた。彼に月子の世話は疲れなかつたかと尋ねると、彼はすぐさま何回か続けて「楽しい、疲れなかつた」と言った。羅さんの妻は一九八〇年生まれで貴州の人で、隣村に嫁いできた。二〇一五年から村で焼きトウモロコシ、焼き芋、焼きジャガイモや棗などの乾物を売り始めた。夫は村の街道、駐車場の掃除など公共スペースの環境衛生を引き受けている。仕事が終わってから、夫婦は一緒にこの屋台を経営し、夫が焼き場を受け持ち、妻が支度と接客をしている。

私の息子は二〇〇八年に生まれて、安産だった。三

○日間月子をし、月子の間は夫が介助してくれた。姑は八〇歳を過ぎていて、一人暮らしで基本的な生活は自力でできるが、私の世話はできなかった。月子の間、夫は炊事、家事やおむつ洗いをしてくれた。彼は毎日私に四回食事を作ってくれた。主に薄いものだが、粟粥、片儿湯〔小麦粉を練って薄く伸ばしながらちぎって汁に入れて煮たもの〕、疙瘩湯〔小麦粉で作る雑炊のようなもの〕などだった。たまに排骨湯〔スベアリブのスープ〕や豚足スープを作ってくれた。月子のときは汗がたくさん出るので、私の服や子どものおむつも全部夫が洗った。私が自分で子どもを世話した。母乳が多くなかったので、子どものためにミルクを作り、おしめを替え、寝かしつけた。遠くから嫁いできたので、実家から人は来なかった。

どのようないきさつで遠く隣村まで嫁いできたのか質問すると、彼女にはこの村の近所の村に嫁いまいとこがあり、この辺りは実家より裕福なので一緒に嫁いできたことだった。

郷さんの家は隣の双石頭村だが、この村でドライフルーツを販売している。観光のシーズンオフ（十一月、十二月、一月を指す）には土曜日に、その他（観光シーズン）には毎日売りに来る。夫は森林保護員を九年間しており、毎月四〇〇元の補助がでる。子どもはずっと寄宿学校に

通っていて、休みの時は祖母と一緒に暮らす。現在には大学に行っている。インタビューの間、郷さんはにこにこして、人が通るのを見ると売り声をあげる。彼女の夫の宋さんはアーモンドを炒りながら、たまに客引きの売り声をあげる。郷さんは言う。

娘は一九九七年に二六〇〇グラムで生まれた。月子は一月で、夫が介助してくれた。母乳が足りず、ミルクも合わせた。夫は毎日五、六回食事を作ってくれ、主に卵、鶏のスープ、粟粥で、鶏肉を食べることが多かった。月子の間は冷たいもの、生もの、辛いもの、塩辛いものは食べられず、私が食べたものはあつさりして、塩の入っていないちよつと醤油を入れたもので、消化の良い汁物が多かった。

郷さんの夫の宋さんは言う。

当時は若く、妻が出産してもなんとも思わなかった。懷柔第一医院で産んだが、彼女に付き添い、三日間入院した。帰宅後は私が月子の介助をした。月子のときに女性が食べるのは薄いものが良い、スープやあつさりした油や塩が少ないのが良いと年寄りに聞いたので、味が無いものを作った。妻が月子の間は、家のことは洗濯、掃除、炊事、羊や鶏の世話はみな私がした。早くから起きて日が暮れるまで忙しくしても、仕事が終わらなかった。

「二人の出産で家族全員大忙し」と言うように、子どもができる<sup>(53)</sup>と家族にはいつもにも増してきつい家事労働がもたらされる。親族ネットワークに頼る伝統的社会では、月に必要な社会的（人的）資源を確保できる。しかし、家族規模の小型化、構造の核家族化、社会の機能化への転換という状況下では、理想的な介助役を選ぶうえにも高齢や病氣や遠く離れているなどの理由で介助に來られないときは、夫が責任をもつて進んで代役をすることになる。これは男性が家族の世話の履行と家族の役割を調整・変更することで、介助人不足の危機に対応することを表わしている。このような実際上の変更は暫定的ではあるが、伝統的な男女分業の境界に対して妥協的な態度をとることを予兆している。儀礼が終われば、彼らはまた家族の男女分業の境界線と、家族のなかの象徴的支配的地位を守ることに努力する。夫の月子儀礼への参加は、家庭のなかの男女平等を促進するかもしれないが、これに相応して平等観念を喚起することはない。夫の月子介助への参加は実用主義の産物であり、文化的価値観念の変化（進歩）の結果ではない。

#### 四 結論

北京の川底下村は、観光経済の開発を経て伝統から現代へと足を踏み入れた。

月子儀礼の介助者の変化には、嫁ぎ先による介助、嫁ぎ先と実家による共同介助、実家による介助の三つのパターンが並存する。嫁ぎ先による介助が、家族成員の権力関係（本質的には家族の組織構造）を表わすとするれば、実家の介助は、家族の階級制度と権力関係の構造的な転換を明示し象徴している。儀礼の変化を通して、親族制度における宗族の偏重から姻族の台頭への転換の傾向をみることができる。どの介助パターンにおいても、介助は、実質的には家庭領域内における女性の無償奉仕である。伝統的な出産に対する穢れと危険の観念が男性を月子儀礼から排除しているが、理想的な介助者がいない場合には、男性（夫）が代役となつて儀礼の介助者となる。このような実際上の変化が、たとえやむを得ない暫定的なことであつたとしても、かえつてそこには現在の変化の傾向と、未来の発展可能な方向が表されている。儀礼の変化は家族間関係の構造を書き換え、再生産しているといえる。

中国社会学界では、農村家庭のフィールドワークを通じて、閻雲翔は家族が個人化する傾向を導き出し、邢朝国は家族が核家族化する傾向を導き出す<sup>(54)</sup>など、家族の変化の趨勢について議論が続いている。現在の中国家族の実態は、過去の家族主義体系における家族とは異なるだけではなく、欧米社会の個人の独立を強調する核家族モデルとも異なる。中国家族は、実は、個人が生存と発展を求めるには

十分な社会的支援が足りないため、家人を頼ってリスクを減らす家族モデルを選択せざるを得ないのである。<sup>56)</sup>

家族関係の伝統回帰は、手段としてはあるが、やはり中国文化における親族の権力や責任、親族感情からくる生活論理によるところが大きい。中国都市の実証研究を通して、中国の家族には手段としての性質と感情的な性質が併存し、個人化と家族化が併存する傾向があり、それらが緊張関係をもたらしていることが明らかになった。<sup>57)</sup>個人と家族の関係は、現在まさに変わりつつあり、日々多元化し複雑化しているのである。

## 注

- 〈1〉金一虹『中国新農村性別結構変遷研究——流動的父権』南京師範大学出版社、二〇一五年、一二三頁。
- 〈2〉俞曉堯『西欧婚姻、家庭与人口史研究』中国出版集團現代出版社、二〇一四年、一九四—一九八頁。
- 〈3〉「英」勞倫斯・斯通『英国的家庭、性与婚姻 一五〇〇—一八〇〇』商務印書館、二〇一一年、五七—七五頁。
- 〔原書初版及び邦訳本=Lawrence Stone (1919-1999), *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*, Weidenfeld & Nicolson, 1977. ローレンス・ストーン『家族・性・結婚の社会史——一五〇〇年—一八〇〇年のイギリス』(北本正章訳)勁草書房、一九九一年〕

- 〈4〉「米」丹尼爾・哈里森・葛學溥『華南的鄉村生活』知識產權出版社、二〇一二年、二頁。〔Daniel Harrison Kuip (1888-1980), *Country Life in South China: the Sociology of Familsim*, Bureau of Publication Teachers College, Columbia University, 1925. D・H・カルプ著『南支那の村落生活——家族主義の社会学』(喜多野清一、及川宏訳)生活社、一九四〇年〕
- 〈5〉「米」閻雲翔『私人生活的變革』(龔小夏訳)上海人民出版社、二〇一七年、一五一—二〇頁。〔Yunxiang Yan, *Private Life under Socialism: Love, Intimacy, and Family Change in a Chinese Village, 1949-1999*, Stanford University Press, 2003.〕
- 〈6〉「米」W・古德『家庭』(魏章玲訳)社会科学文献出版社、一九八七年、二六五—二六九頁。〔William Josiah Goode (1917-2003), *The Family*, Prentice Hall, 1964. ウィリアム・J・グード『家族』(松原治郎、山本健訳)至誠堂、一九六七年〕
- 〈7〉勞倫斯・斯通、前掲書、五頁。
- 〈8〉「米」馬克・赫特爾『變動中的家庭——跨文化的透視』(宋踐、李茹等訳)浙江人民出版社、一九八八年、三八—四三頁。〔Mark Hutter, *The Changing Family: Comparative Perspectives*, Wiley, 1981.〕
- 〈9〉閻雲翔(龔小夏訳)、前掲書、二〇—二四頁。
- 〈10〉「仏」菲利普・阿利埃斯『兒童的世紀——旧制度下の兒童与家庭生活』(沈堅、朱曉罕訳)北京大学出版社、二〇一二年、一〇頁。〔Philippe Ariès (1914-1984), *L'Enfant et*

- la Vie familiale sous l'Ancien Régime*, Librairie Plon, 1960. フリップ・アリエス『〈子供〉の誕生——アンシアン・レジーム期の子供と家族生活』（杉山光信、杉山惠美子訳）みすず書房、一九八〇年）
- 〈11〉 閻雲翔（龔小夏訳）、前掲書、二〇一二五頁。
- 〈12〉 沈奕斐『個体家庭 ifamily——中国城市家庭現代化進程中的個体、家庭与国家』上海三聯書店、二〇一三年、三一頁。
- 〈13〉 石金群「転型期家庭代際關係流變——機制、邏輯与張力」『社会学研究』二〇一六年第六期。
- 〈14〉 沈奕斐、前掲書、三一頁。
- 〈15〉 彭希哲、胡湛「当代中国家庭变迁与家庭政策重构」『中国社会科学』二〇一五年第二期。
- 〈16〉 金一虹、前掲書、五四七—五五五頁。
- 〈17〉 唐燦、陳午晴「中国城市家庭的親族關係」『江蘇社会科学』二〇一二年第二期。
- 〈18〉 學術的慣例に基づき、文中で言及する村の地名と人名はすべて学名である。
- 〈19〉 劉望鴻『川底下村志』中共党史出版社、二〇〇九年、三八頁。
- 〈20〉 『川村第十届村民委员会選舉花名冊』二〇一六年（村の委員潘女士の提供による）。
- 〈21〉 [英] 莫里斯・弗里德曼『中国東南の宗族組織』（劉曉春訳）上海人民出版社、二〇〇〇年。[Maurice Freedman (1920-1975), *Lineage Organization in Southeastern China*,

- Athlone Press, 1958. M・フリードマン『東南中国の宗族組織』（末成道男、西澤治彦、小熊誠訳）弘文堂、一九九一年）
- 〈22〉 [挪] 埃里克森『小地方、大論題——社会文化人類学導論』（董薇訳）商務印書館、二〇〇八年、一六八頁。[Thomas Hyland Eriksen, *Small Places, Large Issues: An Introduction to Social and Cultural Anthropology*, Pluto Press, 1995.]
- 〈23〉 [英] 瑪麗・道格拉斯『潔淨与危険』（黄劍波等訳）民族出版社、二〇〇八年、一一二頁。[Mary Douglas (1921-2007), *Purity and Danger: An Analysis of the Concepts of Pollution and Taboo*, Routledge & Kegan Paul, 1966. メアリ・ダグラス『汚穢と禁忌』（塚本利明訳）思潮社、一九七二年）
- 〈24〉 [米] 賀蕭『記憶的性別——農村婦女和中国集体化歴史』（張贊訳）人民出版社、二〇一七年、二六〇頁。[Gail Hershatter, *The Gender of Memory: Rural Women and China's Collective Past*, University of California Press, 2011.]
- 〈25〉 陳弱水『隱蔽的光景——唐代的婦女文化与家庭生活』廣西師範大学出版社、二〇〇九年、二三頁。
- 〈26〉 [英] 莊士敦『獅龍共舞——一个英国人筆下的威海衛和中国伝統文化』（劉潔訳）江蘇人民出版社、二〇一四年、一〇四—一三七頁。[Sir Reginald Fleming Johnston (1874-1938), *Lion and Dragon in Northern China*, John Murray, 1910.]
- 〈27〉 [米] 易勞逸『中国家族、土地与祖先——近世中国四百年社会經濟的變与常』（苑傑訳）重慶出版社、二〇一九

- 年、六五一六頁。〔Lloyd E. Eastman (1929-1993), *Family, Fields, and Ancestors: Constancy and Change in China's Social and Economic History, 1550-1949*, Oxford University Press, 1988. ロイ・E・イーストマン『中国の社会』(上田信、深尾葉子訳)平凡社、一九九四年〕
- 〈28〉〔加〕朱愛嵐『中国北方村落の社会性別と権力』(胡玉坤訳)江蘇人民出版社、二〇一〇年、一四九頁。〔Ellen R. Judd, *Gender and Power in Rural North China*, Stanford University Press, 1994.〕
- 〈29〉易勞逸(苑傑訳)『前掲書、六五頁。』
- 〈30〉〔仏〕謝和耐『蒙元入侵前夜の中国日常生活』(劉東訳)北京大学出版社、二〇〇八年、一一三頁。〔Jacques Gernet (1921-2018), *La vie quotidienne en Chine à la veille de l'invasion mongole, 1250-1276*, Hachette, 1978. ｼﾞｬｸﾞｴﾙ ｼﾞｬｰﾈｯﾄ『中国近世の百万都市——モンゴル襲来前夜の杭州』(栗本一男訳)平凡社、一九九〇年)〕
- 〈31〉〔独〕羅梅君『北京的生育婚姻と喪葬——十九世紀至当代的民間文化和上層文化』(王燕生訳)中華書局、二〇〇一年、一三二頁。〔Mechthild Leutner, *Geburt, Heirat und Tod in Peking: Volkskultur und Elitekultur vom 19. Jahrhundert bis zur Gegenwart*, D. Reimer, 1989.〕
- 〈32〉〔独〕恩格斯『家庭、私有制和国家的起源』人民出版社、二〇一八年、二九頁。〔Friedrich Engels (1820-1895), *Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats*. エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』)
- 〈33〉〔米〕楊慶堃『中国社会中的宗教』(範麗珠訳)四川人民出版社、二〇一六年、三六頁。〔Ching K'un Yang (1911-1999), *Religion in Chinese Society: A Study of Contemporary Social Functions of Religion And Some of Their Historical Factors*, University of California Press, 1961.〕
- 〈34〉〔米〕伊佩霞『内闈——宋代婦女的婚姻和生活』(胡志宏訳)江蘇人民出版社、二〇一八年、六頁。〔Patricia Buckley Ebrey, *The Inner Quarters: Marriage and the Lives of Chinese Women in the Sung Period*, University of California Press, 1993.〕
- 〈35〉〔米〕大衛・科沢『儀式・政治と権力』(王海洲訳)江蘇人民出版社、二〇一五年、一五〇頁。〔David I. Kertzer, *Ritual, Politics and Power*, Yale University Press, 1988. D・I・カーザー『儀式・政治・権力』(小池和子訳)勁草書房、一九八九年)〕
- 〈36〉楊慶堃(範麗珠訳)『前掲書、三二頁。』
- 〈37〉翁玲玲『麻油鷄之外——婦女作月子的種種情事』稻香出版社、一九九四年、九〇—九三頁。
- 〈38〉〔独〕里夏德・範迪爾門『歐洲近代生活——家与人』(王亜軍訳)東方出版社、二〇〇四年、一一頁。〔Richard van Dülmen, *Kultur und Alltag in der Frühen Neuzeit*, C.H. Beck, 1990. R・V・デュルメン『近世の文化と日常生活』全三冊(佐藤正樹訳)鳥影社、一九九三—一九九八年)〕
- 〈39〉朱愛嵐(胡玉坤訳)『前掲書、一二二頁。』
- 〈40〉同右、九頁。
- 〈41〉〔仏〕克勞德・列維斯特勞斯『我們都是食人族』(廖惠

瑛訳）上海人民出版社、二〇一六年、六四頁。〔Claude Levi-Strauss (1908-2009), *Nous sommes tous des cannibals*, Seuil, 2013. クロード・レヴィ＝ストロース『われらみな食人種（カニバル）——レヴィ＝ストロース随想集』（泉克典訳）創元社、二〇一九年〕

〈42〉〔瑞〕奧維・洛夫格倫、喬納森・弗雷克曼『美好生活——中産階級的生活史』（趙丙祥等訳）北京大学出版社、二〇一一年、一二三頁。〔Orar Lofgren, Jonas Frykman, *Den kulturerade människan*, Gleerups, 1979.〕

〈43〉大衛・科沢（王海洲訳）前掲書、一八頁。

〈44〉〔米〕E・A・羅斯『變化中的的中国人』（何蕊訳）訳林出版社、二〇一五年、一一八頁。〔Edward Alsworth Ross, *The Changing Chinese: The Conflict of Oriental and Western Cultures in China*, Century Co., 1911.〕

〈45〉埃里克森（董薇訳）前掲書、一七二頁。

〈46〉楊善華、劉小京「近期中国農村家族研究的若干理論問題」『中国社会科学』二〇〇〇年第五期。

〈47〉伊佩霞（胡志宏訳）前掲書、四四頁。

〈48〉董曉媛「照顧労働、性別等与公共政策——女性主義經濟學視角」『人口与發展』二〇〇九年第六期。

〈49〉埃里克森（董薇訳）前掲書、一六八頁。

〈50〉劉靖「中国農村地区母親労働供給、非父母照料对兒童健康的影響」董曉媛「性別平等与中国經濟轉型——非正規就業与家庭照料」經濟科学出版社、二〇一〇年、二四八頁。

〈51〉賀蕭（張贊訳）前掲書、一二五頁。

〈52〉〔米〕楊懋春『一个中国村庄——山東台頭』（張雄等訳）江蘇人民出版社、二〇〇一年、一二四—一二五頁。〔Martin C. Yang, *A Chinese Village: Taioon, Shantung Province*, Columbia University Press, 1945.〕

〈53〉〔英〕多林・馬西『空間、地方与性別』（毛彩鳳等訳）首都師範大学出版社、二〇一八年、一七頁。〔Doreen Massey, *Space, Place and Gender*, Polity Press, 1994.〕

〈54〉閻雲翔（龔小夏訳）前掲書、二八頁。

〈55〉邢朝国「中国農村家庭演變——“核心化”還是“个体化”？以私房錢的道德評價為切入点」『社会』二〇一七年第五期。

〈56〉沈奕斐「前掲書、三七頁。

〈57〉鐘曉慧「『再家庭化』——中国城市家庭購房中代際合作与衝突」『公共行政評論』二〇一五年第一期。周群英「代際關係視角下的儀式變遷」『求索』二〇一九年第一期。

※文中の〔 〕は訳者による。